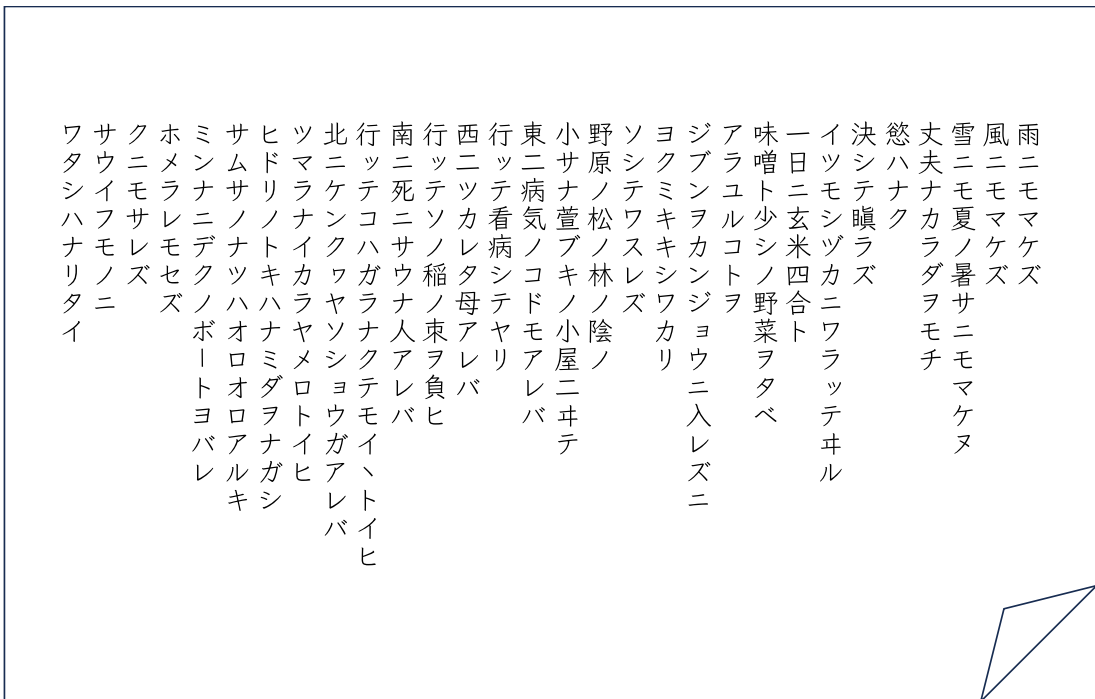


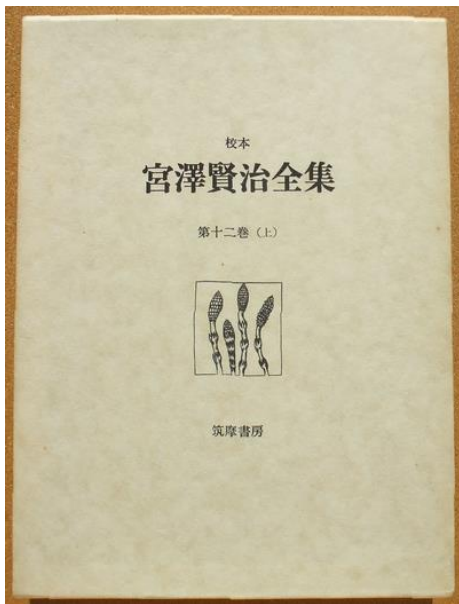
6. 好きな本、好きな歌手

宮沢賢治と島崎藤村

田窪セツ子氏には、辛く苦しい状況に遭遇したときに思い出す詩がある。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」である。この詩は、宮沢賢治の晩年に書かれたものであり、1933年の没後に遺品のトランクから発見された。岩手県の花巻の実家で闘病している間に書かれたと考えられており、宮沢賢治の思想が全面にあらわれている。宮沢賢治は、1896年8月に稗貫郡花巻川口町(現・岩手県花巻市豊沢町)に生まれた詩人・童話作家・教師である。1926年に羅須地人協会を創設して農民のために農業指導をおこなうが、志し半ばで病に倒れ、1933年に37歳の若さでこの世を去った。



出典：宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」『校本 宮澤賢治全集』第12巻(上)、筑摩書房、1982年、44-46頁。



宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」『校本
宮澤賢治全集』第12巻（上）、筑摩
書房、1982年（初版は1975年）。

（今治市立中央図書館所蔵）



島崎藤村『破戒』新潮社刊、2005年。

（今治市立中央図書館所蔵）

この詩を詠むたびに、田窪氏は幼少時代の通学の道のりを思い出す。雨の日も風の日も雪の日も、学校を一日も休まず通った故郷の柳井川の山道を思い出す。

宮澤賢治のほかにも、田窪氏に元気をくれる作家が島崎藤村である。中学校時代の校長が朝礼でよく引用していたのが、島崎藤村の遺した言葉であった。島崎藤村は、1872年3月に筑摩県馬籠村（現・岐阜県中津川市馬籠）に生まれた詩人・小説家である。1897年に第一詩集『若菜集』を刊行し、一躍近代日本ロマン主義の代表的詩人となった。その後も『夏草』や『落梅集』、『椰子の実』などの詩集を世に送り出した。1906年に『破戒』を自費出版してからは小説家として活動するようになった。

教育の現場で島崎藤村の言葉が引用されるケースはしばしばあるが、柳谷中学校の校長をとおして知った島崎藤村の言葉の数々は、言霊のように若い田窪氏の生きる力となった。



親はもとより大切である。しかし自分の道を見出すということはおお大切だ。人は各自自由の道を見出すべきだ。

（島崎藤村『春』岩波書店、1970年）

人の世に三智がある。学んで得る智、人と交わって得る智、みずからの体験によって得る智がそれである。さういふ自分は今日に行き詰まってゐるばかりでなく、出発のそもそもからすでに行き詰まっていた。でも、歩いて出るたびに道が開けた。地に触れるたびに活き返った。

（島崎藤村『破戒』新潮社（新潮文庫）、2005年）

この世を花にするために

田窪氏の人生を豊かにしてくれた歌手の存在も忘れてはならない。往年の大スター・橋幸夫  氏である。小学校のときに偶然手にした雑誌「週刊平凡」  で橋氏の写真が目に入り、「この人の瞳、素敵やな」と目の美しさに一瞬で魅了された。それから橋氏の写真を雑誌で見つけると、ハサミで切り抜いてスクラッチブックにしてコレクションした。雑誌で一目惚れして以来、田窪氏は橋氏の大ファンであり、日常生活のなかになくてはならない存在となった。

橋氏のファン歴およそ60年。田窪氏の橋氏との思い出はたくさんある。かれこれ20年前に遡るが、田窪氏の故郷である久万高原町で橋氏のコンサートが開催された。田窪氏は、今治から駆けつけ「ようこそ橋さん、ここがわたしの故郷なんです」と言って花束を渡すと、「ここは冬になると霧氷ができてきれいでしょうね。今日は霧氷の歌を歌わせてもらいます」と機転の利いた返事が返ってきた。「霧氷」は2005年に発売された曲（作詞：宮川哲夫、作曲：利根一郎、編曲：一ノ瀬義孝）で、男性の恋心を唄っている。

最近では、2017年にファン同行のハワイ旅行が企画され、田窪氏も参加した。30人ほどのファンが橋氏と一緒にハワイへ行き、現地で食事やクルージングなどを楽しんだ。ファンとの距離が近い貴重な企画であり、この機会に田窪氏は橋氏が愛用している香水を初めて知り、帰国後さっそく探して購入した。田窪氏は、仕事でもプライベートでもこの香水をずっと愛用している。

2022年12月20日には待ちに待った橋氏のコンサートが今治市公会堂で開催され、もちろん田窪氏の姿もそこにあった。



そして、2023年5月3日に80歳の誕生日を迎えた橋氏は、その2日前の5月1日に東京の浅草公会堂で最後のコンサートを開いた（2024年4月15日の記者会見で復帰を発表し現在も現役として活躍中）。田窪氏は、仕事のことを考えてこの足を踏んでいたら席数がわずかとなり、半ばあきらめていた。すると、橋氏の実姉から「田窪さん、ぜひ来てくださ

い」との連絡が電話で入り、チケットを手配してくれた。随分昔の話になるが、橋氏の実姉とは、新宿にある京王プラザホテルで開催された橋氏のディナーショーで出会った。偶然にもおなじテーブルの隣席だった。田窪氏は、実姉だと知らずに歓談してすっかり仲良くなった。それからの深い付き合いである。

歌手人生の集大成であるラスト・コンサートは、田窪氏にとって忘れられない思い出となった。コンサート終了後、田窪氏は楽屋に通され、「橋さん、いままでありがとうございました」と一言伝えると、橋幸夫氏が「写真撮ろう」と返してくれた。橋幸夫氏と二人で撮った記念写真は人生の宝物となった。

橋氏は、歌手人生63年でシングル183曲、オリジナル・アルバム32枚をリリースしており、なかでもデュエット曲の「いつでも

夢を」は1963年の日活映画「いつでも夢を」のテーマソングとなり、累計売上260万枚を記録した。そのほかにも日本テレビで放映された「子連れ狼」の主題歌となった「子連れ狼」も大ヒットした名曲である。数多くある橋氏の曲のなかで、田窪氏の好きな曲は「この世を花にするために」と「この道を真っすぐに」である。とくに、「この世を花にするために」（作詞：川内康範、作曲：猪俣公章）は田窪氏の自分への応援歌である。どんなに辛いことがあっても、どんなに悲しいことがあっても、「この世を花にするために」前へ進んでいくだけだ。そんなメッセージが伝わってくる歌詞である。

最後に、橋氏は今治タオルのファンである。コンサートの歌の合間のトークで、今治タオルのアピールをしてくれるのも人情味があっていい。田窪氏の根性の入ったがんばりは、こうした出会いからも生まれている。

「橋さんに会いに行こうというのが、わたしのすごいエネルギーになっているんです。」

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）



参考文献

今治タオル工業組合編『タオル用語事典（タオル技術情報解説集）』
今治タオル工業組合、2019年。

愛媛新聞社「愛媛新聞」2015年2月27日朝刊、16-17頁。

尾崎一水編『愛媛県商工総覧』増田兄弟活版所、1950年。

「柳谷小学校の沿革」久万高原町立柳谷小学校ホームページ

（<https://yanadani-e.esnet.ed.jp/history>）。

編集後記

田窪セツ子さんは、なんとも言えぬ心地よい癒しの声の持ち主です。中途半端が大嫌いで、何事も一度決めたことは最後までかっちり成し遂げる強い意思の持ち主ですが、それでいて誰をもふわっと包み込むような包容力を感じさせる素敵な女性です。田窪さんから醸し出される柔らかな感じは、素敵な笑顔のせいでもあります。少しハスキーがかった甘い声のせいでもあります。ここでは「せっちゃんボイス」と仮に名付けましょう。

田中産業で伸べ士として仕事をする傍ら、後進の育成にも力を注いでいますが、「せっちゃんボイス」はある種の魔法を纏いながら、どんな個性ある若者でも田窪さんの前ではオープンマインドになります。田窪さんには安心して委ねられるのだとおもいます。若者が一人前の伸べ士に成長するように、ときには厳しく指導することもあるようですが、「せっちゃんボイス」から発せられる言葉は一つひとつに愛情が込められています。インタビュー時にもそれは感じました。

子育てや介護を経験し、仕事との両立のなかで人には言えない苦労も多々あったとおもいます。しかし、どんな局面でも「希望」と「夢」をもちつづけ、しなやかに明るく乗り越えてきた田窪さん。周りの多くの人を幸せにしてきた田窪さんには不思議な「人たらしオーラ」があるようです。事実、小学生からファンだった橋幸夫さんと、親戚でもないのに、同郷でもないのに、仲良しです。どうやったらそうなるのか？その答えは、声でもなくオーラでもなく、田窪さんの生き様そのものにあるとおもいます。「他者のための強さをもつ」という生き様に。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の39人目は、今井タオル（株）の動力ミシン部門主任を務める藤原直美氏である。藤原氏の祖母も母も縫製のプロフェッショナルとして今治の綿織物業に従事し、そして藤原氏もいま縫製技術者として老舗タオルメーカーの今井タオルのブランドを縫製の面から支えている。次回は藤原氏のタオル人生について話をうかがう。